

税理士の ひとりごと

No. 133

武士は食わねど高楊枝

税理士 齋藤明

先日SNSを見ましたら、公認会計士の男性が弁理士の女性といわゆる「男が奢るか論争」みたいなバトルを繰り広げて盛り上がりつついたのです。キツカケは、その会計士が弁理士を飲みに誘ったところから始まります。その際の会計が6900円。そこでその会計士がレジ前で「3000円で良いよ」と女性に告げたところ、その弁理士は渋々3000円を払ったのだそうです。うですが、どうやらその弁理士からすると納得がいかなかったようで、後日SNSに「男性の方から誘っておいて、割り勘なんて信じられない」と投稿し、それに対して会計士側が「自分の方が多く払っているのに文句を言うな」と反論をしたのです。

その後二人のやり取りはヒートアップし、会計士が腹立ち紛れに、その女性の容姿や年齢のことに言及したりしたものですから、そのSNSは荒れ放題に荒れ、コメントが殺到したというわけです。結局、よくよく後から2人のやりとりを見てみると、どうやらそれはあくセス数を稼ぐために仕組まれた炎上商法だったようで非常にバカらしかったのですが、それはそれとして、そのコメント欄に投稿された数々のコメントがツッコミどころ満載で、とても面白かったのです。たとえば、その会計士が普段からお金持ちアピールをしているにも関わらず、なぜ割り勘なんだ？とか、金持ちの男性が女性を飲みに誘う店にしては会計が6900円ってシヨボくないか？とか、900円多く払うだけで「3000円で良いよ」という上から目線の物言いが鼻につくとか、女性の見た目や年齢を理由に足元を見て「高い店で奢る価値もない」と判断したのではないか？とか、外野はもう言いたい放題なのです。面白おかしく私はそれらを拝見しながら、その一方でSNSをバズらせる

ために手段を選ばないその投稿者の抱える闇の深さを感じてしまったのです。その投稿者は2人とも士業の方で、調べればすぐに個人が特定されてしまうことは明らかであるにも関わらず、なぜこんなカッコ悪い話を世間に広めてまで自分の承認欲求を満たしたいと思っただけでしょうか？ アクセス数が増えたことよって、いくらかの収入が入ったのかもしれませんが。フォロワー数も増えたのかもしれませんが。しかし彼らがこれっぽっちの対価を得るために失ったものは、決して小さくはないのではないかと思うのです。

かつて日本のお侍サンは、自分の名誉を守るためなら切腹も厭わないくらいに自らのプライドを大事にしていたというのに、現代の士(さむらい)業の人にとっては1円にもならないプライドなんかよりもフォロワー数の方が大事なことなのでしょう。文化人類学者ルース・ベネディクトによれば、

わが国の道徳観は、世間様の目を気にして恥を知ることを土壌として培われてきたというのですが、恥も外聞もなく自らのプライドを貶めてでも世間様の注目を集めたいだなんて、古い価値観を持った私からすれば理解しがたい愚行にしか思えないのです。

何はともあれ、話を元の「男が奢るか論争」に戻しますと、どうやら世間の皆様は、相手と自分を「年齢」「所得」「性別」などを基準として、自分が奢る立場なのか奢られる立場なのかを判断をしていることが分かりました。確かにそれは合理的なやり方のようにも思えるのですが、そもそも相手と自分を比較してつてところあたりがセコいとは思いませんか？

「武士は食わねど高楊枝」という言葉があります。それは昔のお侍サンが見栄っ張りだったということではなくて、貧乏をしてもそれを表には出さずに気品高く生きた武士の美德を表

した言葉なのです。もしも私たち日本人がそんな彼らの子孫としてのプライドをまだ少しでも持ち合わせているのであれば、相手が自分より上であれば、「カネなら俺が払うぞ」とカッコつけたって良いではありませんか。でも、そんなことをコスパだ！ タイパだ！と言っている若い人の前でおうものなら、「いつの時代の話だ？」と一蹴されてしまうってことくらい、私だつて分かっていますけどね。



Akira Saito

昭和40年生まれ。神奈川県出身。平成15年税理士登録(東京支部)。齋藤明所長・日本経理士会監事。水研人会。波乗り。http://blog.livedoor.jp/saiki555/

【近況】我が家の愛犬「太郎」は異常なまでに怖がり、雷が鳴ると怖くなって、網戸をかき破って外に逃げようとする羽目になってしまいました。